

## 『鳴らないピアノ』

### 1

「ねえ、どうしてこのピアノはならないの？」

まだ幼いその子は不満そうに隣にいる母親に呟いた。

目の前には多くの傷がつく年季の入った黒いピアノがある。

その子はピアノの前に座り、何回も鍵盤を叩いて音を出そうとしていた。

しかし、どれだけ頑張ってもピアノが音を鳴らすことはなかった。

「なんでだよ！」

彼が鍵盤を叩いてもう一時間になる。叩いても鳴らない、不満が溜まる、意地になってまた叩く。

これを延々と繰り返し、ついに痺れを切らしたのか、彼は不満をぶつけるように鍵盤を乱暴に叩いた。

「こらこら颯太。そんなに強く叩いたらピアノがかわいそうでしょ？」

「でも、ならないんだよ」

「じゃあ、もしかしたらピアノが痛いって拗ねちゃったのかも」

「ピアノはそんなこと思わないよ」

軽い冗談に似た注意に彼、颯太は口を尖らせる。

「ねえ、どうしてピアノを弾こうとしてるの？ もしかして、幼稚園で何かあった？」

拗ねた颯太に母は困ったように笑いながら横に座った。

颯太は今までにピアノに興味を持ったことはない。それが、彼は今日初めてピアノを弾きたいと言って、急いで母を連れてこのピアノの前に座ったのだ。

母の質問に、颯太は少し俯きながら答える。

「お母さんが、いっつもこのピアノを見ててさびしそうにしてたから」

その思いもよらなかった理由に母は少し驚いた。

「……そっか。颯太は優しいね」

悔しがる颯太を見た母は彼の頭をゆっくりと撫でた。

「このピアノね、昔は鳴ってたんだよ」

「ほんと!？」

「うん。お母さんもたくさん弾いたなー」

母はピアノの鍵盤に手を乗せ、懐かしむように笑った。

それを見た颯太はどんな面白い話が聞けるのかと目を輝かせ、母はその期待に応えるように次々このピアノの思い出を語る。

「だけど、颯太が生まれるよりずっと前に鳴らなくなったの」

「なんで？」

「それは……分からない、かな。でもね、何度か音が鳴った時があったの」

母は思い起こした記憶をなぞるようにピアノに触れる。

「最近だと、颯太が生まれる頃だよ」

「ボクが、生まれてくるとき？　なんで、そのときになったの？」

「きっと、このピアノが奇跡をくれたんじゃないかな」

「きせき？　ボクが生まれたことはきせき、なの？」

「もちろん。颯太が私たちのところに生まれてきたのはすごいことなんだよ」

そう言った母は颯太に体を密着させる。

母はとても幸せそうな表情をしていた。もうそれだけで、十分と思えるほどに。

「でも」

たった一つ。目の前にあるピアノを見ながら。

叶わぬ願いであると知りながら、母は呟いた。

「できるなら。もう一度、聞いてみたいな」

母の遠くを見るような目にはどのような景色が広がっているのか。見上げる颯太には見当もつかなかった。

それでも、颯太は母の願いとも言える感情を子供ながらに感じ取り、あることを決心した。

颯太は思い立ったように立ち上がり、その決心を口にする。

「なら、ボクがひく」

「え？」

「ボクがこのピアノをひいて、お母さんにきかせてあげる！」

颯太の大きな声は部屋に響き渡り、母は彼の言葉に不意を突かれる。

母は颯太を見つめる。そこには胸を張る頼もしい我が子の姿があった。

その姿を見た母の瞳はわずかに潤み、

「ありがとう」

その潤み隠すように、母は颯太を抱きしめる。

しばらく抱きしめた後、落ち着いた母は静かに颯太から離れる。

「でも、今の颯太じゃきっと弾けないよ」

「なら、いっぱいひいてうまくなる！　うまくなって、ぜったいにこのピアノをお母さんにきかせるんだ！」

そう言って、颯太は再びピアノに向かった。

弾き方など知らない小さな手で鍵盤を懸命に叩き、ピアノはそれに応えるようにボコボコと弦を叩く音を返す。

音が鳴ることはない。それでも、彼はがむしゃらに、思うがままに、音のない音を奏でる。

これは、彼が今できる、精一杯の演奏だった。  
そんな演奏を聴いた母は微笑み、  
「楽しみにしてようかな。いつかきっと、その日が来るまで」  
小さく呟いた母の言葉には颯太の成長を楽しみにしている感情と、わずかに――後ろめ  
たい色が隠れていた。

## 2

――照明、うざいな。  
燦然と輝く照明が主役である彼と、黒いグランドピアノを照らしている。  
その照明は彼らが下にいる限り、永遠に彼らを照らし続け熱を与える。  
その熱は徐々に彼の身体を蝕んでいた。  
背中には大量の汗が流れ、それを吸収した服が背中に密着して絶妙な不快感を彼にもた  
らしている。  
――早く、終われよ。  
心の中で愚痴を零した。彼は演奏中だった。  
目の前にあるピアノの鍵盤の上で指を走らせ、綺麗に音を奏でる。  
――そんなに俺のことは見んなよ。鬱陶しい。  
ただ演奏に集中しているわけではなく、心ここにあらずといった様子だ。  
照明や観客の視線が気になり、挙句には演奏が終わらないかを切に願う。  
演奏家がさっさと演奏が終われと思うなど言語道断だ。でも、彼は願ってしまった。  
――早く、終われ。  
なぜなら、彼――谷島颯太は、ピアノが嫌いだからだ。

演奏が終わり、彼は舞台に前に立ち観客に顔を向ける。  
観客席にはちらほらと人がいるが、はっきり言って少ない。  
それもそのはず。これは一般向けのコンクールなどではないからだ。  
「では野田先生、感想をどうぞ」  
司会役の女性が、舞台に最も近い場所に座っている男性にマイクを渡した。  
彼は野田歩。国内のみならず、海外でも人気の高い有名なピアニストだ。  
「……はぁ」  
野田がマイクを受け取った瞬間、酷く退屈そうな溜息が会場に鳴り響いた。  
「えっと、谷島、颯太君、だっけ？」  
「はい」  
「君、やる気あった？」

## 3

いきなり核心を突かれた言葉に颯太は息を飲む。

これがこの演奏会の真の姿。ここは各々が演奏をし、それに対してプロである野田が意見を述べる批評会だ。

「その感じ、凶星のようだけど。何か言いたいことは？」

「……いえ。その通りです」

威圧感とも取れる野田の雰囲気から颯太が太刀打ちできるはずもない。そもそも、そう思って演奏していたのだから、彼の意見に文句のつけようなどなかった。

「君は、何を思いながらピアノを弾いていたんだ？」

「それは……別に何も」

「ああ知ってる。そうだろうなどは君の演奏を聞いたら分かったよ」

野田は嘲笑し、そのあまりにも挑発的な振る舞いに颯太は苛立ちを覚えた。

これは、この批評会ではよく目にする光景だった。

野田はあえて演奏者のこれまでの努力を馬鹿にするような言葉をかけ、それに対してどのような反応をするのかを見ていた。

なぜこのようなことをするかというと、野田はこの反応にこそ演奏者の本質が見えると考えているからだ。

「君はそこそこ上手い。でも、上手いだけで、演奏に心がない。例えていうなら……君がしているのは白と黒の鍵盤を覚えた通りに押していく作業だ」

颯太の演奏をここぞとばかりに馬鹿にするように笑った野田。

だが、これでも動かない颯太を見た野田はもう一押しする。

「作業をしにここに来られてもね。作業なら君がピアノを弾く必要はないんだし。機械にでも任せておけばいい。その方が君なんかよりずっと上手い。何か、意見はあるか？ 谷島颯太君」

野田はマイクを口から離して颯太の意見を待つ。

颯太は少し考えるいると、

「機械に任せておけばいい、か」

野田の発言の中にあつた言葉を無意識に拾い上げ、復唱した。

彼は口遊んだ瞬間、その言葉が妙に腑に落ちた。

「……確かに。俺なんかより、機械の方がずっといいな」

颯太は薄ら寒く笑った。まるで、自分の演奏などどうでもいいように。

それを聞いた野田の余裕だった表情は曇る。

「本気で、言っているのか？」

野田は本心からの言葉なのかを確認するが、颯太は言い淀むこともなく「言葉の通りですよ」と否定しなかった。

それを聞いた野田は啞然として颯太を見つめ、思えば初めから変だったと野田は彼の態

度を一から思い出す。

やる気のない演奏に心の籠っていない音色。この時点で気付くべきだったのだ。

彼が、ピアノに対して真摯でないことを。

それでも野田は信じたかったのだろう。彼もここに来る演奏家と同じ向上心がある人間だと。

しかし、結果は違った。これ以上はもう何も聞けないと思った野田は問いかける。

「君は、どうしてピアノを始めたんだ？」

野田はまだ、颯太のことを信じていたかったのだろう。

この問いは彼が颯太にできる最後の手助けだった

「きっかけ……」

颯太は記憶を掘り出すが、そこには白い世界しか広がってなかった。

「何も覚えてないです」

「なら思い出すといい。ピアノを始めたきっかけ、ピアノを始めた頃の思い。それを思い出してからでも、きっと遅くはない」

颯太は返答しない。

「この批評会は半年後にもう一度ある。そこで、君の答えを聞かせてくれ。以上だ」

野田の批評は終わり、司会の女性にマイクを渡した。

会場には微妙な空気が漂う。そんな空気を背に、颯太は舞台を去った。

そして、舞台裏。彼は誰もいないことを確認すると、苛立ちを込めた拳を壁にぶつけ、

「何が想いだ。何がきっかけだ。俺の演奏に価値がないなら、はっきり言えよ」

怒りを口から吐き捨てる。

「やっぱ——ピアノなんて、嫌いだ」

その声は、虚しく舞台裏に反響するだけだった。

### 3

高校一年生、谷島颯太はピアノが嫌いだった。

「従え」と命令する譜面。

結果ばかり気にして、いい結果を持ち帰ってこなければ怒鳴る講師。

結果を取ったとしても、楽譜通りで心が籠っていないと陰で蔑む第三者。

何をとっても、嫌いな要素しかなかった。

「……クソが」

批評会は終わり、帰路に着いた颯太の上にはいつもより赤く見える夕焼けが広がっていた。

その帰り道、彼の脳内では野田の最後の問いが何度も何度も繰り返されていた。

『君は、どうしてピアノを始めたんだい？』

颯太には、どうしてもこの言葉の真意が分からなかった。

思い出せば分かるかもと記憶を順に掘り起こすが、思い出せるのはピアノの嫌な記憶ばかりで颯太は余計にむしゃくしゃした。

「始めたきっかけなんてどうでもいいだろ」

投げやりな言葉と共に、颯太は道端に転がる小石を一蹴する。

その後も、幾度となく野田の批評と嫌なピアノの嫌な記憶が蘇り、颯太の気分は最悪。

その最悪な気分はもはやピアノだけに向かず、道ゆく他人にまで苛立ちを覚えさせるようにまで膨れ上がっていた。

「クソ、クソクソクソ！ どいつもこいつも……！」

どうして自分だけが苦しんでいるのかと、颯太は周りを睨みつける。

そうして怒りに任せて歩いているといつの間にか家の前に立っており、颯太は荒々しく扉を開けた。

「颯太お帰り」

玄関が開いた音を聞きつけた母が出迎えにやってくる。だが、苛ついている颯太は返事もせずは無視して、横を通り抜けようとする。

それに対し、母は少し悲し気に笑い、

「今日の演奏会、どうだった？」

「……別に」

「野田先生まだ元気にした？ きっと、根も葉もないこと言って色んな人を怒らせたんでしょ」

「……」

「お母さんも昔、『お前の演奏は品がない』って言われてね。お母さんももう我慢ならなくて、品がなくても情熱はあります！ って言ってやったの。そしたら野田先生声を出して笑ったのよ。それでね」

昔のことを懐かしく思ったのか、軽快に話す母はとても楽しそうだ。

そんな笑っている母を見た時、颯太は自分の荒んだ心が徐々に赤く染まっていくことに気がついた。

——なんで、そんなに楽しそうにしてるんだよ。

心の奥底から怒りが込み上げ、その怒りは全身を巡り体を熱くさせた。

颯太は許せなくなった。自分がどれだけ苦しんでいるかも知らずに、楽しそうにピアノを語る母のことが。

そして。

「うるさい！」

歯止めが利かなくなった怒りは口から溢れ出てしまう。

「そんな話聞きたくもないんだよ！」

颯太の瞳には激しく動揺する母の姿が映るが、彼にはもうどうでもよかった。

「ど、どうしたの？ 何か野田先生に何か言われた？」

「ああ言われたよ。心が籠ってない、機械が弾いた方がマシだって！ でも、そういう風に弾けて言ったのはお前らの方だろ！ 俺を縛り付けて、こんなくだらねえもんにしたのは全部全部、お前らのせいだろ！」

楽譜も、講師も、結果も。全ては颯太に正確な演奏だけを求めた。そこに、彼の意思は必要なかった。

颯太はそれが自分という存在を否定されている気がして嫌だった。

でも、颯太はピアノから逃げることができず、弾き続けるしかなかった。

そうして長い間、颯太はずっと自分の嫌いな演奏を続けた結果、彼は自分の全てを縛り付けるピアノが嫌いになった。

「待って、何を言ってるの」

「母さんも関係ないとか言わせないからな。俺の演奏を聴いても何一つ文句を言わない。母さんも俺のピアノを認めてたんだろ。俺なんかいない死んだような演奏をさ！」

「違う！ お母さんはそんなことを思ってない！ 颯太、いったん落ち着こ。落ち着いて、話して。お願い」

激情を吐き捨てる颯太を宥めようと母は少し怯えながら笑いかけるが、それがかえって彼の怒りに油を注ぐことになる。

「ふざけんなよ！ 誰のせいでこうなったと思ってんだよ」

颯太は怒りはもはや憎しみに近くなっていた。

「母さんさえいなければ、俺がピアノなんて弾かずに済んだのに……」

静かに放ったその言葉を境に、廊下には静寂が流れる。

言いたいことはまだまだたくさんある。だが、それ以上に颯太は自分を苦しめた母を苦しめたい欲望が芽生えた。

ただ暴言を吐くだけでは優しい母を最大限苦しませることはできない。

だったら、言うことは一つだった。

彼はゆっくりと歩きだし、二階へ続く階段の前でその言葉を口にする。

「俺、ピアノ辞めるわ」

短い言葉だ。でも、颯太には分かっていた。

この言葉が母にとっては最も重い言葉だと言うことを。

「……颯太、何を言って。待って、考え直して」

「は？ やっぱ都合のいい道具がなくなるのは嫌か？ どこまでも自分勝手な親だな！」

「いい加減にしろさい！ 颯太、一回ちゃんと話を！」

母は颯太の腕を意地でも離さないように強く掴んだ。

「まだ、俺を縛り付けるのかよ。そのせいで俺が苦しんでるって分かってんだろ！」

「颯太！」

「離せよ！」

「お願い、話を聞いて！ 颯太！」

「……っ！ 離せって言ってんだろ！」

怒りの限界を迎えた颯太。直後、背後で鈍い音と呻き声が聞こえてきた。

自分は何をしたのか。怒りで何も覚えていない颯太は恐る恐る後ろを振り向くと、

「う、うう……」

母が頭を抱えて倒れていた。

颯太には母を突き飛ばした感覚はないが、現実がそれを物語る。

「そう、た……そうた」

頭が割れるような痛みを抱える母。そんな痛みを持ってもまだ、必死になって颯太に何かを伝えようと必死に口を動かすが、声が出ない。

「……俺は、ピアノが大嫌いだ」

「……」

「母さんがなんで俺にピアノを弾かせたのか、だいたい想像がつく。どうせ、ピアニストだった時の栄光を引き継がせるために、俺を無理矢理ピアニストに仕立て上げたんだろ」

「ち、違う。あなたは」

「……もう、いいよ」

何と言っても無駄だと悟った颯太は、

「まって、そうた……颯太あ！」

悲痛めいた母の叫び声を背に階段を上がり、自室へと駆け込み部屋を見渡した。

彼の部屋には練習用のピアノが置いてあり、本棚にはこれまで弾いてきた楽譜の数々が収納されている。

「はは……これでお前らから解放されるのか」

颯太はそれらを見てから、腕についた手の痕を眺める。

母の手すら拒めたのだ。颯太はそう思うと、もうピアノと関わる必要がなくなると、嬉しく思った。

しかし。

「なのに何で、まだこんなに！」

収まりかけた怒りが再発する。

あれだけ不満を曝け出したと言うのに、颯太の心は満たされてはいなかった。

溢れ出す怒りが颯太を侵食し、すぐにでも発散しなければ頭がおかしくなりそうだった。

「あああああ!!」

彼は叫んだ。

行き場のない怒りを追い出すために喉が張り裂けんばかりの絶叫を繰り返した。

さらに、本棚にある楽譜たちを乱暴にばら撒き、破り捨てる。

「こんなもんがあるから、俺は！」

颯太は狂ったように部屋を荒らし、自分を縛り付けていたものを片っ端から壊した。

壊して壊して壊して。目に入るものを全て壊した彼に残った最後のものは、壊した残骸と、虚しさだけだった。

#### 4

時間が過ぎ、颯太が気がついた時には月夜の明かりもない暗い夜になっていた。

どれだけの時間をかけて破り捨てたのか。

颯太はゆっくりと目を動かし、部屋に散乱している楽譜の残骸を見渡した。

「……こんなことやったって、何も変わらないこと分かってんだろうが」

怒りは消えたが、颯太は酷い虚無感に襲われた。

冷静になった今なら分かる。こんなことをしたって今までピアノに費やした時間が消えるわけではないと。

颯太はまた蹲り、再度時間が経過する。

その間、颯太はどうしようもない後悔に苛まれ、潰されそうになっていた。

そんな時、扉を叩く音が部屋に反響する。

「颯太、入るぞ？」

それは父の声だった。

颯太は扉に目を向けるがすぐに視線を戻して返事すらしない。

「返事がないってことは、勝手に入っても文句は言うなよ……おお、これまた随分と荒らしたもんだな」

返事をしない颯太に痺れを切らした父は勝手に部屋の中に入り電気をつけると、そこに広がっていた光景に一瞬だけ言葉を失う。

「勝手に入ってくんなよ」

「文句は言うなって約束だ」

力のない颯太の意見を切り捨てた父は近くにあるベッドに腰をかけた。

それから、父はすぐには口を開かずに部屋のことを観察した後、じっと部屋の隅で蹲る颯太のことを見つめた。

「母さんと喧嘩したんだって？ お前も親に向かって口を利けるようになったんだな」

「うるさい。母さんに言われて俺を連れ出すために来たんだろ。最初からそう言えよ」

「残念、ハズレだ。俺は颯太と話がしたいと思ってここに来た。母さんは関係ない」

「嘘つけ」

「ほんとだって」

父は少し笑う。

「さて、前置きはここまでだ。颯太、何かあったんだ？ お前と母さんの喧嘩だ。きっとピアノ関係のことなんだろう。言ってみ」

それを聞いた颯太は父を鼻で笑った。

「ピアノのことなんて何も分からないくせに」

「確かにな。でも、ピアノのことが分からなくても、颯太のことなら分かるよ」

「分からないから、こうなったんだろ」

「……そうだな。そこは親として不甲斐ないばかりだ。こんなに追い詰められているお前に気付けなくて、悪かった」

父は颯太に向けて深く頭を下げる。

その謝罪を受けた颯太は、なぜか心が重くなった。

「今さらそんなこと言っても、遅いだろ」

「遅いなんてことはない。だから、父さんはここに来たんだ。颯太、話してくれ。幸いにもここにはピアノを全く知らないやつが一人いるだけだ。独り言でいい。俺は、お前のことが知りたいんだ」

「頼む」と、父はさらに頭を下げ、颯太は顔を上げて初めて父の姿を見た。

すると、颯太はさらに心が重くなり、次第に父にこのようなことをさせていることに対して、強烈な罪悪感に襲われてた。

なぜ、そんなものを感じたのか。颯太はもう、分かっていた。

「今から喋ることは独り言だ。聞き流してほしい」

「……ああ」

颯太は震える声で語りだす。

「俺さ、ずっと前に結果が出ない時が続いてたんだよ。何をしても、どれだけ頑張っても結果を得られなくて、今みたいにイライラしてた時期があったんだ」

「――」

「その時にさ、もうどうでもよくなって、コンクールでただ楽譜を忠実に再現する機械みたいな演奏をしたんだ。そしたら、入賞して。それまでの結果が全然だったから色々な人に褒められたんだ」

「――」

「それから、俺はずっと自分を殺して演奏を続けた。そしたら、形だけでも結果を残せるから。演奏から自分を排除して、死んだように演奏を続けて、いつしかこの演奏に自分は必要ないことが分かった」

「――」

「でも、それに気付いた時にはもう遅かった。やめようとしても、俺が積み上げてきた演奏は体に染みついて、振り払うことは無理だった」

「――」

「俺はずっと、自分のいない演奏を続けた。こんな演奏じゃ駄目だって分かってながら。何度もピアノを辞めようと思ったよ。でも、できなかった。俺のちっぽけなプライドがピアノから逃げることを許してくれなかった」

「――」

「最初から分かってたんだ。悪いのは全部俺だって。でも、俺はこんな屑な自分を一生懸命に守ろうと、ピアノを嫌いと思い込んで、全部ピアノのせいにして逃げたんだ。馬鹿だろ、自分が苦しむことぐらい分かってただろ」

「――そう、だったのか。本当に、すまなかった。息子がこんなに悩んでいるのに何もしてやれなかったなんて、俺は親失格だ」

颯太の苦しみに満ちた告白を聞いた父は、なぜ気付いてやれなかったんだと自分を叱責するように強く唇を噛み締める。

「父さんはさっき、親子喧嘩って言ったけど。あれは俺の一方的な八つ当たりだった。全部、俺が招いたことなのに、それを母さんのせいにした。ほんと、最低だよな」

笑い声を出す余裕すらない颯太だが、それでも自分を嘲笑せずにはいられなかった。

颯太は最初からピアノを憎んでなどいなかった。ただ、彼の自尊心がそれを強制させ、自分ですら気付くことのないように蓋をしたのだ。

全ては自業自得だ。

なのに、颯太は自分のせいなのに頭を下げる父の姿を見て胸を痛めたのだ。

「こんなことなら、ピアノなんて弾かなければよかった」

こんなに周りを気付つけてしまうのならピアノなど始めなければよかったと心の底から思う颯太。

その颯太の言葉を聞いた父じゃ眉間にしわを寄せた。

「弾かなければよかったなんて、颯太が言うんじゃない」

「じゃあ、俺はなんでピアノを始めたんだよ」

「忘れたのか？ ……まあ、ずっと前のことだし無理もないか。よし、付いてこい。颯太がピアノを始めたきっかけを見せてやる」

父はそう言って颯太を連れて部屋の外に出て、一つの部屋の前で立ち止まった。

「ここって、物置だよな？」

「ああ。ここが、お前のピアノの始まりだ」

父は二階にある物置を開ける。

開けた瞬間、埃が舞い上がり颯太を汚く出迎えてくれた。

颯太の見渡す限り、段ボールが積みあがっているだけで特に変わったものはない。

父はそんな段ボールを横にどかして奥へと足を進めた。

そして、一番奥には少し開けた空間があり、その中心には、  
「これが、颯太のピアノの始まりだ」

黒いピアノがあった。

颯太はそのピアノに吸い込まれるように歩み寄る。

随分長い間使われていなかったのか、大量の埃を被っていた。

そんな埃まみれのピアノを見た彼は無意識に一音だけ弾いてみる。

「……鳴らない」

ピアノは鳴らなかった。どの鍵盤を弾いても鳴ることはない。

「颯太はよく、ここで母さんと一緒にそのピアノを弾いたんだ」

「一緒に……」

颯太は周囲をぐるっと見渡すと、記憶と重なる光景が広がっていた。

窓際に椅子が置いてある——よく、母さんが座っていた椅子だ。

本棚には子供向けの楽譜集があった——母さんが教えてくれた曲だ。

ピアノには落書きがあった——母さんと一緒に書いた落書きだ。

「あ……」

記憶は一瞬にして蘇る。

音、熱、明かり、匂い、仕草、優しさ。彼の奥底に眠っていたものが一気に表に顔を出した。

「なんで……」

ピアノを撫でてその時のことを思い出した颯太は、ある一つの約束を思い出した。

——ボクがこのピアノをひいて、お母さんにきかせてあげる！

「なんで、忘れてたんだよ……こんな、大事なこと」

一つ一つの記憶を鮮明に呼び起こす。

どの記憶にも母がいて、優しく笑いかけてくれていた。

「母さん……」

忘れていた懐かしい思い出は颯太の目の奥を熱くし、その熱は頬を流れ鍵盤に落ちる。

「このピアノで弾いていた時間は短かったからな。忘れていたのも無理はない」

鍵盤を眺める颯太の横に父は立ち、肩を優しく叩いた。

それからしばらくの間、颯太は母との思い出に耽った。どの記憶も暖かな温もりに包まれていて、いつの間にか怒りや虚無感は消えていた。

母との大切な思い出を取り戻した颯太。

「俺、謝りにいかないよ」

自分がどれだけ馬鹿なことをしてしまったのかと、それを謝りに行きたくなった。  
「……いい表情になったな。よし、俺も一緒について行ってやる。母さん、怒ると怖いからな」

「ありがとう、父さん」

今までの空気を和ませるように笑った父につられ、颯太も久しぶりに笑った。

彼らは部屋を後にし、緊張を胸に一階に下りた二人はリビングに入り、母を呼ぶ。

「母さん」

しかし、母の返事はなかった。

テーブルの上には食事が乗っていた。

おそらく、颯太のことをずっと待っていたのだろう。食事はすでに冷え切っていた。

颯太がそれを確認して、ふと目を横に逸らすと、そこには。

「……かあ、さん？」

――母が、倒れていた。

## 5

「母さん、具合はどう？」

「心配しなくてもお母さんは大丈夫だから。それより颯太。学校はいいの？」

「今日は祝日だよ」

「そうだっけ？ あー、もうそんな時期か」

呑気な物言いの母は颯太を見て笑った。

ここは病院の一室。母はその部屋のベッドの上にいる。

「ねえ、次の批評会まで、後どのくらい？」

「三か月後だよ」

「三か月か。なら、今度こそ野田先生を一泡吹かせるくらいの時間はあるね」

「そう、だね」

母はとても元気そうだった。

でも、時折見える服の隙間からは以前の母とは思えないほど細い腕が見え隠れし、それを見た颯太は心を握り潰されるような感覚に襲われた。

「ごめん、ちょっとトイレ行ってくる」

「行ってらっしゃい」

颯太は外に出るが、トイレには行かずに適当なソファに座って頭を抱える。

母は元気に振舞ってはいるが、それは心配させないためにしんどいのを我慢していることを颯太は知っていた。

なぜなら母の命は――もう、後わずかしかないから。

医師から突き付けられた宣告は、余命半年。

どうやら、母は元から脳に異常があり、あの日、頭への強い衝撃と共にその異常が急激に悪化したらしい。

その衝撃に颯太は覚えがあった。

母を突き飛ばしたあの時だ。

「それって、俺が……嘘だ……俺が母さんを……俺が！」

父は「お前のせいではない」と言ってくれたが、颯太は自分のせいだと自責の念に押し潰された。

それから月日が流れた。

何とか治療を続けているが、回復の余地は一向に見られない。

だから、颯太と父はできる限りの時間を母と一緒に過ごすことを決めた。

母と、いつ別れてもいいように。

それからというもの、彼らは母との時間を全力で過ごした。

これから過ごすはずの時間の分まで、彼らは母と語り合った。

いつまでもこの時間で止まってほしいと何度思ったことか。

でも、現実は無慈悲だ。

母の命は刻一刻と終わりに近づき、余命一か月を切った時。

「では、これから一週間。家族との最後の時間を送ってください」

医師はそう言って、母を一時的に退院させた。

これが、病院側にできる最後の配慮なのだろう。

病院を出た三人は久しぶりに家族全員で家の床を踏んだ。

「母さん、お帰り」

「ただいま、皆。遅くなってごめんね」

そして、母と過ごす最後の時間が訪れた。

とは言え、母はいつもと変わらない生活を過ごした。掃除をしたり、料理をしたり、ご飯を食べに行ったり、何気ないことを噛み締めるように繰り返した。

母にとって、家族といつも通りの日常を送ることが何よりも幸せであり、それ以外の特別なものを必要としなかった。

だが、多くの時間を共に過ごしてきた父は違った。

ふとした瞬間に突き付けられる現実に幾度となく涙を流し、今まで通りの時間を過ごすことなどできなかった。

そんな父を見た颯太は、決意を固めた様子であるピアノが置いてある部屋を開ける。

部屋は母の手によって掃除され、積み上げられていた段ボールは見る影もなくなった。

その部屋の中心。そこには、あのピアノが変わらずに颯太に顔を向いていた。

彼にはこのピアノに向かう理由があった。

それは、母との約束を守るためというのものもあるが、もう一つ理由がある。

あの時、母は言ったのだ。

——このピアノが奇跡をくれたんじゃないかな。

その言葉を信じて、颯太は藁にも縋る思いでこのピアノを鳴らそうと懸命に弾いた。

毎日、毎日毎日毎日。鳴らないピアノを鳴らそうと皆が寝静まってから何時間もピアノと向き合った。奇跡が起これと、鳴ってくれと願いながらずっと弾き続けた。

しかし、彼の思いはピアノには届かない。

「なんでだよ……鳴れよ！　鳴ってくれよ！　鳴って、くれよ……頼むから」

颯太は自分の無力さに涙した。

そんな彼を嘲笑うかのように、時間は無情にも過ぎていく。

そして、最後の一日。残された時間はわずかとなった。

でも、颯太は諦めなかった。その日の夜もピアノに向き合っていた。

ピアノの前に座った颯太は大きく深呼吸をし、最後の願いを込めて指を鍵盤の上で走らせ、一心不乱にピアノを弾く颯太。

一回で鳴らなければ、二回目三回目と。何度も何度も、音を鳴らすために己の全てをかけて演奏をする。

「鳴れ、鳴れ、鳴れ、鳴れ……いい加減、鳴りやがれ！」

いつまで経っても音を出さないそのピアノに颯太は拳を叩きつけた。

「なんで鳴らないんだよ！　こんな時に起こすのが奇跡だろ！　だったら起こせよ！　奇跡を起こして、母さんを救ってくれよ……なあ、頼むから……母さんを、救ってくれよ」

颯太は目の前のピアノに泣き崩れる。

彼の脳裏にはこれまで過ごしてきた母との記憶が流れていた。

楽しかった記憶から悲しかった記憶、寂しかった記憶に辛かった記憶。大切な思い出を思い出せば出すほど、颯太は母がいなくなることに耐えられなくなった。

「かあ、さん、母さん……」

嗚咽を吐きながら、颯太は遠くに行くことを引き留めようとする子供のように、母のことを呼んだ。

「……颯太」

その声に、誰かが返事をした。

顔を上げ、颯太は声の方を向くと、

「かあ、さん」

母が見つめていた。颯太にすぐに涙を拭き強引にせき止める。

「……ずっと、弾いてたの？」

「どうにかして、鳴らせないかなと思って」

母はそこで「どうして？」とは聞かずに、ピアノを一瞥してから苦痛めいた表情で口を開いた。

「ごめんなさい。お母さんね、嘘、付いてたの。実はそのピアノ、もうずっと前に」

「壊れてるんだろ。俺も多少はピアノを触ってきてる。壊れてることぐらい、分かるよ」

先取りされた言葉に母は驚いたが、すぐに視線を下げて申し訳なさそうに話し出す。

「ごめんね。嘘ついてまであんなこと言って。これじゃあ、颯太に言われた通り、私が強引にピアノを始めさせたようなもんだよね」

「違う！ あの時の俺は本当にピアノを弾きたかったんだ！」

「……やっぱり優しいね、颯太は」

母は颯太の優しさに微笑を浮かべる。

「ごめんなさい。あなたに、何もしてあげられなかった。苦しんでいる時も気付かなかったし、今だって颯太にこんなに思いをさせて。本当に、親として情けない。こんな親でごめんなさい」

「そんなことないよ！」

「ううん。事実なのは事実。本当なら、これから颯太の歩む道を手助けしないとイケないのに……」

母の声が震えた。

その時、颯太は初めて見た。

母が涙を流すところを。

「もっと、一緒にいてあげられなくて。色んな事に気が付いてあげられなくて。こんなに早く颯太を置いていく母親で……ごめんね」

母の「ごめんなさい」はとても辛そうで、聞いた颯太の目頭が熱くなる。

母はずっと我慢していた。最後の最後まで我慢して、できるだけ家族に辛い思いをさせないようにと心に蓋をしていた。

でも、颯太を見た瞬間に母は自分の思いを止めることなんて出来なかった。

母は颯太のことを愛しているから。

「ずっと一緒にいたかった。もっと話をしたい。一緒にどこかにも行きたい。成長する姿を見ていたかった。まだまだたくさん、一緒に笑っていたいよ……颯太」

「……」

「ごめんね、颯太。子供の前でみっともない姿を見せて」

溜め込んでいた気持ちを吐き出す母は声を出して泣いた。

颯太は母の思いを聞き、止めていた涙が流れそうになったが、

「母さん」

覚悟を決めた表情を浮かべ、涙を堪えた。

「まだ、このピアノの音を聞かせてないね」

「颯太、そのピアノは」

「大丈夫だって、あの時より上手くなってるから。だから、母さんはいつもの椅子に座って、俺の成長した姿をちゃんと見てて」

颯太は再びピアノに向き合い、母は椅子に座り颯太のことを見守る。

その時、颯太は母のことを見つめて、あの時言いそびれた仲直りの言葉を紡いだ。

「母さん。あの時、酷いこと言ってごめん」

「……うん。許してあげる」

視線の先では母が優しく微笑んでいる。

ようやくできた仲直りは颯太の胸に引っかかっていたものを消した。

もう、言い残したことはない。後は、母に演奏を聞いてもらうだけだ。

「————」

音のない静かな夜。颯太の演奏が始まった。

全神経をピアノに集中させ、指を軽やかに走らせる。彼のその姿は一介のピアニストとして遜色ない。

が、ピアノは鳴らない。颯太が押す鍵盤に合わせて、弦を叩く鈍い音が部屋に満ちるだけだ。

——もう関係ないだろ、そんなの。

颯太は鳴らなくても演奏を止めなかった。

強く叩いたりもせず、優しく撫でるようにピアノを弾いた。

もう、颯太にとって音が鳴らないことはどうでもよかった。最後に、母にピアノを弾いている姿を見せられただけで、十分だった。

——母さん。母さんのおかげで俺はここまで成長できました。ありがとう。

颯太は感謝してもしきれない想いは演奏に感情をもたらず。

——小さい時はたくさん一緒に弾いたっけ。楽しかったよ。

思い出が演奏に色を与えた。

母はどんな時も颯太の隣にいてくれた。

かけがえのない思い出が胸を暖かくしてくれる。

——生意気言ったりしてごめん。母さんをたくさん困らして、ごめんなさい。

母への謝りは演奏に強弱をつけた。

今思えば、口から出た出まかせばかりで、そんなことを言っていた過去の親不孝な自分を殴りたくなった。

それから、颯太は母に伝えたい想いを、演奏に込めた。

様々な想いは指先を通じて、ピアノに伝わっていく。

そして、最後に颯太は一番大切なことをピアノに流し込んだ。

——母さん。今までありがとう。本当に、ありがとう……大好きだよ。  
颯太の愛情がピアノに伝播していく。  
母にたくさんの愛情を注いでもらった彼は、今度は自分の番だと、母にありったけの「好き」を届ける。  
その愛情を最後に、彼は全て伝えた終えた。  
もう伝え残すことはない。後は、最後まで弾き切るだけになった。  
その時だった。

ピアノから、音が鳴る。

今まで鳴らなかったピアノは、颯太の想いに応えるように音を奏でる。  
その音は、母と同じ、優しさに満ちた綺麗な音色だった。  
音は部屋を充満し、颯太のことを優しく抱きしめる。  
颯太は演奏する手が震え、堪えていた涙が溢れ出た。  
もう、鍵盤は涙で見えていない。色んな感情が入り乱れて、何も考えられない。  
それでも、彼は弾いた。  
演奏者として、聞かせたい人のために最後まで弾き続けた。  
そして、颯太は最後の音符を奏で、鍵盤から手を下した。  
颯太はどうしようもないほど泣いていて、母はそんな彼を抱きしめる。  
「颯太、上手くなったね。ありがとう。母さんの願いを、叶えてくれて——愛してる」  
こうして、颯太の、母へ送る最後の演奏が幕を閉じたのだった。

## 6

数週間後。

颯太は再び批評会の場に立ち、以前と同じように野田の前に立っていた。  
「……いろいろと言いたいことはあるが。その前に一つ。何か、あったのかい？」  
立ち振る舞いも、ピアノの演奏の質も以前と違う颯太に野田は問う。  
「先生の言った通り、俺は自分のピアノを弾いたきっかけを思い出しました。そのおかげです」  
「……そうか。なら、ようやく私も思う存分口出しできるというものだ！」  
颯太の成長を嬉しそうに笑った野田は、いつも通り気に食わない箇所にケチをつけ、演奏者を馬鹿にするような態度に戻った。  
そんな態度に、前の颯太は投げやりになっていただろう。  
しかし、彼は前のようなピアノに対して不誠実ではない。

颯太は言われた文句に対して自分の意見を主張し、それに対して野田がさらなる発破をかけ、過去一番に熱い口論が会場に響き渡った。

一時間ほどかけて口論はようやく終結を迎え、颯太は疲れた表情で会場を出て会場の近くにある噴水の前に向かった。

そこには、彼が待ち合わせしている人がいる。

急いで向かった颯太。

そして、辿り着いた場所には車椅子を押す父の姿と。

「いい演奏だったよ。颯太」

車椅子に座って、笑う母の姿があった。

あのピアノを弾いた日から、母の容態は改善へと向かった。

それに父と颯太は泣いて喜び、医師もこれには「奇跡でも見ているかのようだ」と驚きを隠せていなかった。

それもこれも、全てあのピアノのおかげだったのかもしれない。

だがあれ以降、あのピアノは役目を終えたのか、音が鳴らなくなり再び深い眠りについた。

少し寂しい気もしたが、いつも通りに戻ったと颯太は深く考えないようにしていると、

「ねえ颯太」

ふいに、母に名前を呼ばれた。

「なに？」

「ピアノは、まだ嫌い？」

それは颯太がこれまで思ってきたことだった。

でも、もう心の蓋もちっぽけなプライドもどこか遠くに捨ててきた。

今なら、颯太は素直な気持ちで答えられる。

瞳を閉じ、大きく息を吸った颯太は屈託のない無邪気な笑顔で、母にこう言った。

「いやー大好きだよ！」

2020年10月16日